

モデル藻場造成実証事業（アラム・カジメ場造成）

團 昭紀・吉見圭一郎・天真 正勝

県南域で重要な水産資源であるアワビ，ウニ類の餌として藻場は不可欠であり，魚類においても初期に生活する場所として重要である。しかし，近年これらの藻場が減少している地区があるため，藻場を短期的・低コストに造成する技術を開発することを目的に，標記事業を実施した。

方 法

造成基質の設置：平成 11 年 1 月に日和佐町友垣地先（図 1）に 2 トン自然石を用い，水深 4m 付近に藻場造成用の基質を設置した。

造成地及び周辺の海藻植生調査：平成 11 年 9 月 28 日に，造成地及び近傍の地形の異なる場所（図 1）でのライントランセクト調査を実施した。

スポアバックの設置：平成 11 年 12 月に，造成地に成熟部位を持ったアラム葉片を入れた網袋を設置した。また，併せてスポアバック設置周辺の基質面上の浮泥を掃除した。

結果及び考察

造成地の日和佐町友垣は，地形的に見て静穏域に属し，海底は浮泥に被われている。2 トン自然石を投入し造成基盤を作ったが，その周辺の海底の転石も浮泥に被われていた。ライントランセクト調査の結果，造成地を通る A ライン（図 1）では，大型海藻（アラム，オオバモク）は水深 1～1.5m の極めて浅い場所にしか存在しないことが分かった。また，水深にかかわらず食害生物である，ウニ類，小型巻き貝が豊富であった。少し離れた異なる地形の場所（B ライン）では，水深 7m 付近までアラム，7～8.5m の範囲にカジメが分布していた。浮泥の量と食害生物の量は B ラインの方が A ラインに比べ少なく，このことが大型海藻の分布に影響を及ぼしていると推察された。スポアバック設置によるアラム藻場造成の効果は現在調査中である。

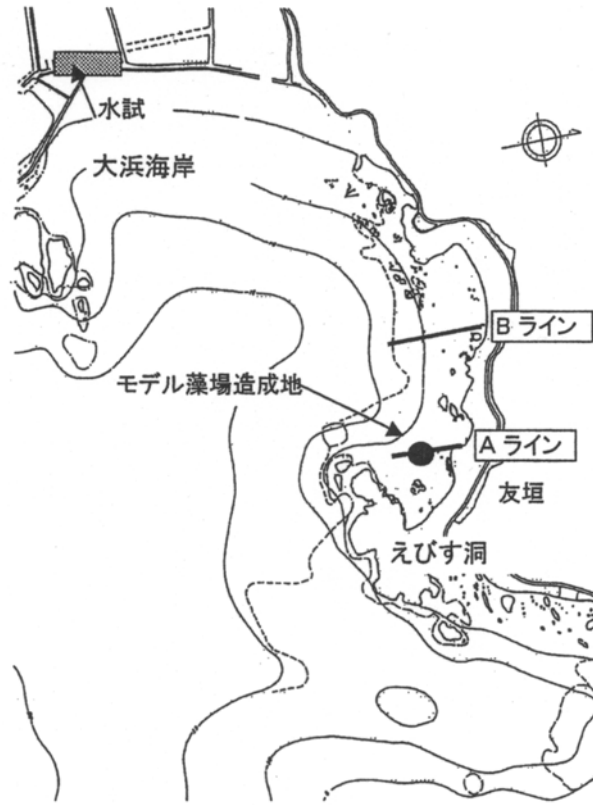


図1 モデル藻場造成地